近代詩の敗北

―詩人の戦争責任―

阿部　猛

阿部猛

近代詩の敗北

詩人の戦争責任——

大原新生社

阿部　猛（あべ　たけし）

昭和2年　山形県に生まれる
26年　東京文理科大学史学科卒業
北海道教育大学助教授・東京学芸大学教授を経て
現　在　東京学芸大学長　文学博士
日本古代・中世社会経済史専攻
傍ら，日本近代詩史の研究に従事す
現住所　東京都東久留米市大門町2—3—8—402

詩人の戦争責任
近代詩の敗北　©一、三〇〇円
昭和五五年二月五日　一刷
著者　阿部　猛
発行人　大原敬治
東京都千代田区内神田二—四—二中山ビル
発行所　株式会社　大原新生社
電話　(〇三)二五六—九五四七
振替口座　東京　八—二九二八〇番
東京都千代田区富士見一—一—23フジミビル
発売所　株式会社　産学社
電話　(〇三)二六一—三三九三
振替口座　東京　八—七九八四〇番

1092-8003-2733

はじめに

明治以来のわが国の「近代詩」の歴史は、すでに百年に近い。他のすべての文化的な存在が、西欧模倣による「近代」化の道を歩んだ如く、詩もまた「西欧」の衝撃なしには成り立ちえなかった。わが国において「近代化」とは西欧化の謂に他ならなかったのである。

詩においては、江戸時代における蓄積は必ずしも明治以後の「近代詩」展開のための直接的な基礎にはなりえなかった。例えば、私どもは、見逃すことのできない、一八世紀半ばのひとつの詩を知っている。与謝蕪村の「北寿老仙をいたむ」である。

君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に
何ぞはるかなる
君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ
をかのべ何ぞかくかなしき
蒲公の黄に薺のしろう咲たる
見る人ぞなき
雉子のあるかひたなきに鳴を聞ば

友ありき河をへだてゝ住にき
へげのけぶりのぱと打ちれば西吹風の
はげしくて小竹原真すげはら
のがるべきかたぞなき
友ありき河をへだてゝ住にきけふは
ほろゝともなかぬ
君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に
何ぞはるかなる
我庵のあみだ仏ともし火もものせず
花もまいらせずすご〳〵と行める今宵は
ことにたうとき

私は、はじめてこの詩を読んだときの感動を忘れることができない。それは信じがたい想いであった。この詩はしばしばわが国近代詩の源流をなすと評価されることがあるが、明治初期の新体詩は、蕪村詩の発展という形では展開されなかったのであり、私どもは、はるかのちに蕪村を再発見せねばならなかったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

幾多の混乱と混迷――ある場合には西欧詩の直接的な移植にとどまり、理論過多の未消化な声高らかなスローガンが唱えられ、あるいは、いたずらに高踏的に己が城を築かんとし、また前衛の名のもとに奇を衒う一派もあった。しかし、全体を見渡すならば浪漫主義も耽美主義も、民衆詩も芸術詩派もプロレタリア詩も、それぞれ、わが国の詩のひとつの達成を示すものではあった。ともあれ、私どもは高村光太郎や萩原朔太郎・佐藤春夫・三好達治・金子光晴らを持ち、「近代詩」の行きつく先を見届けようとしていたのであった。

しかし、日本の「近代」が、脆弱な基盤の上に築かれていたことを、私どもは直ちに思い知らされる。一発の銃声が詩人たちを狂気せしめた。戦争は「近代詩」などを、いとも簡単に吹きとばしてしまった。数十年の蓄積など忽ちにして色を失い、「近代詩」は敗北した。それはまた信じがたいほど鮮かな事実であった。しかるにこの「近代詩の敗北」の事実は、多くの日本近代詩史にはほとんど書かれることなく、かりに触れるとしても、その評価はあまりにも妥当性を欠くように私には思える。私が禿筆を顧みず、あえてこの書物を公けにしようと思ったのも、実にこの点にある。私は多くの人びとに「近代詩の敗北」の事実を知ってもらいたかった。したがって、私はなにかを論ずるというよりも、資料として事実を示すことに心がけたつもりである。この小著が、日本近代詩の見直しに少しでも役立てば、望外の幸せである。

昭和五十四年十二月

著者しるす

はじめに……一
1 詩人の評価……九
(一) 抒情詩と戦争詩——三好達治——……九
(二) 愛国詩……二
2 十二月八日の感激……二九
(一) 十二月八日——岡崎清一郎——……三〇
(二) 「蛙」の参戦——草野心平——……三六
(三) 「ウルトラマリン」の詩人の戦争詩——逸見猶吉——……四五
(四) 二重国籍者の悲劇——野口米次郎——……五三
(五) 故郷の山河——竹村俊郎——……五七
(六) 草莽われら——丸山薫——……六四
3 脆弱な主体性……七六
(一) ひ弱なヒューマニズム——尾崎喜八——……七七
(二) 「銀の匙」と「戦車兵」——中勘助——……八〇
(三) 老いたる民衆詩派——福田正夫——……九九
(四) 神々のあけぼの——大木惇夫——……一〇七
(五) 国民詩の進撃——神保光太郎——……一二〇

もくじ

4 前衛詩の崩壊……一三
(一) 撃滅の賦——村野四郎——……一三五
(二) 「蝶」の行方——安西冬衛——……一四六
(三) 制服を着る詩人——近藤東——……一五四
(四) 権力に屈して——高橋新吉——……一五九
5 芸術派詩人の参戦……一七四
(一) 「かなりや」と「荒鷲」——西条八十——……一七八
(二) 『奉公詩集』——佐藤春夫——……一八六
(三) 機知と知性の失墜——堀口大学——……一九四
6 戦いは彫大な痴夢……二一〇
(一) 酔いどれた詩人——真田喜七——……二一一
(二) 勤王の志蔵——原伸二郎——……二一七
(三) 「指の旅」の戦争責任——壺井繁治——……二三七
7 狂気……二三九
あとがき……二五五

装画　藤井秀平

近代詩の敗北

――詩人の戦争責任――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1　詩人の評価

(一)　抒情詩と戦争詩――三好達治――

三好達治の戦争詩　詩人三好達治の名を知らぬ人は少いのではなかろうか。かれが大衆に最も人気のある詩人のひとりであることは疑いない。その詩は文学全集には必らず収録され、教科書に掲載され、多くの解説や評論が書かれている。そしてなによりも、多数の読者を対象とする軽装の文庫本として、かれの詩は普及する。いま私の手もとには四種の文庫本がある。新潮文庫『三好達治詩集』(河盛好蔵編)、角川文庫『三好達治詩集』(石原八束編)、中公文庫『日本の詩歌22　三好達治』(阪本越郎注)、岩波文庫『三好達治詩集』(桑原武夫解説)である。これらの詩集を読んで直ちに気づくことのひとつは、三好達治が太平洋戦争中に書いた戦争詩が、ほとんど含まれていないという点である。

三好達治には多数の戦争詩があり、それをまとめた詩集としては、①『捷報(しょうほう)いたる』(昭和十七年)、②『寒析(かんたく)』(同十八年)、③『干戈永言(かんかえいげん)』(同二十年)などがある。このうち『捷報いたる』は「十二月八日」と題する二行詩、「くにつあたはらへよとこそ／一億の臣らのみちはきはまりにたり」に始まり、その内容は次の如くである。

十二月八日／捷報臻る／アメリカ太平洋艦隊は全滅せり／昨夜香港陥つ／汝愚かなる傀儡よ／馬来の奸黠／新嘉坡落つ／この夕べ／ジョンブル家老差配ウインストン・チャーチル氏への私信／化け銀杏／一陽来／第一戦勝祝日／あたうちて／落下傘部隊！／九つの真珠のみ名／三たび大詔奉戴日を迎ふ／陽春の三月の天／春宵偶感／アメリカはいづれの方よ

初版発行部数、実に一万部であるが、これが抒情詩人三好達治の詩かと眼を疑いたくなるほどの惨憺たる詩が紙面を埋めている。詩集の表題となった「捷報臻る」の詩を引いてみよう。

捷報いたる
捷報いたる
冬まだき空玲瓏と
かぎりなき大和島根に
捷報いたる
真珠湾頭に米艦くつがへり
馬来沖合に英艦覆滅せり
東亜百歳の賊
ああ紅毛碧眼の賤商ら

何ぞ汝らの物慾と恫喝(どうかつ)との逞(たくま)しくして
何ぞ汝らの艨艟(もうどう)の他愛もなく脆弱なるや
而して明日香港落ち
而して明後日フイリッピンは降らん
シンガポールまた次の日に第三の白旗を掲げんとせるなり
ああ東亜百歳の蠹毒(とどく)
皺だみ腰くぐまれる老賊ら
已にして汝らの巨砲と城塞とのものしきも
空し
そは汝らが手だれの稼業の
ゆすりかたりを終ひに支へざらんとせるなり
かくて東半球の海の上に
我らの聖理想圏は夜明(よるあ)け
黎明のすずしき微風は動かんとせり

いうまでもなく、太平洋戦争の緒戦の勝利をうたったものである。この詩には三好達治の詩心はまっ

たく見えず、無惨な追従と、低次元の感動と、あられもない詩人のうろたえと、品位のなさが認められるだけである。他の詩もほぼ同様である。「落下傘部隊！／落下傘部隊！／落下傘部隊！／見よこの日忽然として碧落（きらく）彼らの頭上に破れ／神州の精鋭随所に彼らの陣頭に下る／落下傘部隊！／落下傘部隊！／こはこれ大東亜聖理想圏の尖兵」と始まる「落下傘部隊！」なる詩ひとつをとってみても、三好の詩情のかけらも見えない。「笑ふべし　脂肪過多デモクラシー大統領が／飴よりもなほ甘かりけん　昨夜（さくや）の魂胆のことごとくは／アメリカ太平洋艦隊は全滅せり！」（「アメリカ太平洋艦隊は全滅せり」）、「もと彼ら漂海の賤賈／東亜一百歳の蠹賊／魔薬阿片の押売行商どもが／あまつさへ強請（ゆす）り取り騙（かた）り取りたる香港――」（「昨夜香港落つ」）などの句を一々あげつらうまでもない。「ジョンブル家老差配ウィンストン・チャーチル氏への私信」に至っては、その発想・構想・表現の品位を欠き低劣なること、時代の制約を超えて、なお批判に値いする。

ひいきのひきたおし　世に「ひいきのひきたおし」ということわざがある。試みに『広辞苑』を見ると、贔屓することによって、かえってその人を不利に導くこと」と定義してある。「ひいきのひきたおし」は、いろいろな場合に見られるが、三好達治の場合にも、その恐れなしとしない。三好の戦時中の言動について、あまりにも批判のないことは、かれの評価を行うにあたって一種の偏向をもたらすものとなりはしないか。評論家小川和佑はその著『三好達治の世界』（昭和四十七年）で、「一人の詩人の生涯を語ることは、彼の全詩業を再検証するという方法以外に語り得べくもない。詩人の生涯とはその作品

に他ならないからである」と正しくも主張している。しかるに小川は、右の著書で、三好の戦争詩については全くといってよいほど触れるところがなく、自らの主張を裏切っている。また、これも一般によく読まれているらしい吉田精一著『日本近代詩鑑賞――昭和編――』（昭和二十九年）は三好の戦争詩には全く触れず、「近代詩の進むべき道を我と挫いて、古めかしい韻律のうちに詩心を求める方向は、即ち定型的な文語詩の復活は、戦争が次第に苛烈の度を増すに従って詩壇に見られた現象であった」とし、三好もまた例外ではなかったとのみ記している。

先に掲げた角川文庫版の「解説」では、「戦局の急迫につれていくつかの戦争時事詩をも書いている」とし、石川淳の文章（後出）を引用して、それは「憂悶の至情」をあらわしたものだとのみ記しているにすぎない。新潮文庫版の「解説」で河盛好蔵は、「戦争中の三好君は時局の要請に応じて多くの戦争詩を作った。それらの詩は『寒析』（創元社）『捷報至る』（文体社）『干戈永言』（青磁社）の三詩集のなかに輯（あつ）められているが、本選集には『寒析』から『群雀』と『ことのねたつな』の二篇だけを採録した。これだけを見ても三好君が単なる戦争詩人ではないことが分ろう」といい、そのあとに桑原武夫の文章を引用している。

「戦争になって君も戦争詩を作ったが、君はやはり自然詩人であった。そうじて、自由をもたぬ日本人が戦争を歌ふとすれば、戦争は天変地異にほかならぬわけであり、自然詩となるのは当然である。君は戦争を、戦果に一喜一憂する一国民としての君のわが身に引きつけ、かくすることによってこれ

を実感のうちに歌った。（この際、プリンス・オブ・ウェルズ轟沈の報を悲しみをもって聞いたもののみが、君の戦争責任をいふことができる）」（三好達治君への手紙」『現代日本文化の反省』昭和二十二年）

＊ プリンス・オブ・ウェルズは、イギリス東洋艦隊所属の戦艦で、太平洋戦争開戦直後の十二月十日、マレー半島沖で、巡洋艦レパルスとともに、日本航空隊の攻撃をうけ沈没した。

桑原の文章を引用した河盛の意図は明白である。この桑原の言葉は三好を弁護するの余りであろうが、品位にかかわる文章といってよい。とくに末尾の「プリンス・オブ・ウェルズ」云々は言いがかりもはなはだしい。次に、中公文庫版に付した石川淳の文章「詩人の肖像」（『夷斎小識』に再録）を見よう。

「かの戦中の詩歌を見直せば、いかに恰好はぶざまでも、その表情はいたましくひびく。事のゆくたては何であろうと、現実の日本のいくさというものに、三好は烈士の感動をもってただちに応じたのだろう。そして、ことばの吟味にきびしい詩人が、情の激するところ、ナリフリかまわず、手あたりに雅言俗語を一つかみにして、天にむかって歌いあげることを憚らなかったのだろう。ことばにおいて危地を踏んで、あわれむべし、国難におもむくという底の気合はこもっている。いうまでもないことだが、この絶叫は他のぐうたら詩人が時勢に寸法を合せて作ったオソマツとはいっしょにならない」

といい、三好の真情とは「しめやかな憂国のこころ」だという。戦争詩を書き愛国詩を書いた三好達治は、ついに「憂国の詩人」に仕立てあげられている。事実に就いてみるがよい。なるほど、著名な「お

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.